

# 両親の家の建て替えから自宅のリフォームへ

築60年になる古い家屋を解体し、新しい「住育の家」を両親にプレゼントした工務店の社長がいる。古いばかりでなく危険でもあった家が、安全で快適な住まいに変身した。家を建て直すことは小さい頃からの社長の夢。それを叶えたいま、新たな課題に直面している。これからこの問題にどう向き合っていくかは、社長だけの問題ではなく、家族の協力が必要だ。家をつくることは、家族関係を見直すことでもある。

## 私が経営を変えた理由

### 工務店のビフォーアフター 「住育の家」との出会いから

CASE  
3

やまなか工務店  
[大阪府岸和田市]



中山さん夫妻と宇津崎光代さん(中央)



天草の新しい両親の家の外観



天草の新しい家の玄関ホール。段差をなくした

**住育視点の間取り**  
建て直す家は「住育」の視点に立ち、海を臨める南向きの一一番いい場所にLDKを配置した。見晴らしのよい外にはデッキもつくり、自然を満喫できる。また階段は外に面するように設け、室内的段差をなくし、主寝室は北側においた。

人が集まる部屋は家のとつておきの場所につくり、居心地をよくする。主寝室はゆっくり広げるよう落ち着いた場所に。そして水回りは寝室の近く、両親が利用やすい位置に。そんな考え方で立ったプランだ。

床・壁・天井にしっかりと断熱を施し、温度のバリアフリーも実現。今年2月に完成したが、古くからある庭の植栽や苔が生えた擁壁などは残し、周囲の環境との調和も図った。擁壁の上にはツタ系の植物を植える予定だ。外観も海と里山に囲まれた自然に馴染むように落ち着いた色で仕上げた。

ひとつだけ「住育」の視点から外れているのがトイレのドアの設計方だ。住育の家を提唱する宇津崎光代さんは、トイレから直接浴室に入る開口をとるべきだといふ。そのため真二さんは家族で話し合つたが、どうしてもオ

パンな浴室には抵抗があった。いまは両親とも歩くのに不自由はないが、将来を考えると両親の部屋とトイレ、洗面、浴室が直につながっている方が望ましいと、介護を取りは「住育の家」の大きな特徴だ。幼い子供がいる家庭や高齢者がいる家庭では、この間取りを取り入れると、主婦が世話をする負担が減るという。風呂の出口にキッチンをつくり、ドアを開け放てば、子供が入浴している様子がすぐ見え、親も子も安心できる。また汚れも洗面所や浴室ですぐに洗い落とせる。

宇津崎さんは、ハコを売るのではなく暮らしを提案するのが工務店の本来の役割だと指摘。「使い勝手より見た目やデザインを優先すると、家は身体に合わない服のように居心地の悪い場所になる」とい、オーダーメイドでも予算を抑える工夫の一つとして家を小さくすることを挙げる。狭くても、動き線と収納を考えた家なら決して住みにくくはならない、と。

また、回廊動線の大切さも説く。「行き止まりのない間取りは、どこにいても家族の気配を感じられる」と強調。そうしてできるだけ

今回は、だんじり祭りで有名な大阪府岸和田市のやまなか工務店を訪ねた。社長の中山真二さんは熊本県天草の出身。そこにはいまも両親が2人で暮らしている。真二さんは高校卒業後、ゼネコンに勤めながら一級建築士の資格を取った勉強家。休みもなかなか取れない勤務だったので、8年前一念発起して脱サラ。奥さんの雅子さんと工務店を立ち上げた。

岸和田市の住宅街に建つ事務所は、2階が自宅になっている。少し時間のゆとりもできた頃、「住育の家」の考え方と出会い、長年の夢だった両親の家を建てることが決意した。

高台に建つ実家は、道路から玄関までが急な石坂になっている。雨が降ると苔むした石がつるつる滑り、若い人でも何かにつかまらなければ登れない。またトイレや浴室も土間を介さないと行けない間取りで、時間がかかり不便だと

いう。台所や玄関など至るところに段差があり、高齢者が住むには適さず、老朽化も進んでいた。こんな状況をみかね、関西に住む3兄弟が力を合わせて昨年11月から新しい家づくりを開始した。特に真二さんは「住育の家」のマスタークラスに通いながら天草と大阪を往復し、資材や職人を運んだりして、肉体的にもきつかったという。

高齢者夫婦が老朽化した家に2人で住むケースは、今後ますます増える見通しだ。家をリフォームしたり、建て替えるたりする際には、その家を継ぐ子供がいるかどうかでお金のかけ方は変わる。そのため家を建て直す時、真二さんは両親だけでなく兄弟も交えて話し合つた。その結果、いまは離れて住む長男が、退職後、実家に帰ることになった。全面的に建て直す方向で話が進んだのは、家を受け継ぐ人ができたことが大きい。